

第十八世紀西欧女性観の一典型の研究 (上)

石 塚 勝 雄

× × ×

「女らしい」とか「女らしく」とか「女らしさ」などという言葉は、巷間でも知識層の間でも、今なおよく使われているようである。筆者なども、時に甚だ便利・重宝な言葉なので使わしてもらうことがあるが、実のところその意味内容はよく分らない。ところが、西欧社会にもこれとよく似た「女らしい性格」(the Female Character)とか「女らしい女」(a womanly woman)とか言われるものが生れ、それは大体第十八世紀になって完成・昇華した。これも歴史に現われた一つの女性観ではあるが、総じてある特定の女性観の正体をつきとめることは必ずしも容易ではない。その原因は種々考えられるのであるが、女性観とか女性論とか正面から銘打って書いた文献が何時の時代でも殆んどないからでもある。そこで特定の時代・社会に生れた社会慣習・社会制度・文芸作品・諺・言草・女子教育論・女性訓などを資料として、そこから間接的に抽出・推論する方法による他はない。これは「女らしい性格」と言われる女性観の研究の場合も同様である。そうした言わば間接的資料を遺した代表的人物としては、ルソー(周知の『エミール』の第五篇女子教育論)・アディソン(Joseph Addison)・グレゴリ博士などが挙げられる。ところが最後のグレゴリ博士のもの『ある父の娘への遺訓』(A Father's Legacy to His Daughters, first published in 1774) は小冊子でありながら、女性の各方面を網羅的によく代表しているので、本論はこれをテキスト

トにすることとした。なお「彼は決つて極端論者ではなく、時には風変りな良識を示す場合はあつても、ある意味では進歩的でもあり、当時の女性觀を反映・記述している点でこれ以上のものはない」^(註)からでもある。

女とか男女關係などのことは、他の事柄よりも洋の東西を問わない共通点を多く持っている。この「女らしい性格」も日本の「女らしさ」と大変よく似通っている。これらは近代フェミニズムの攻撃の矢を浴びながらも、今なお根強く生き残り、我々の頭の中にも巢食っている。したがって、その正体をつきとめ明確に意識に上せることは單なる女性史的意義に終わるものではなく、正に時代史的意義があると言えよう。

著者グレゴリ博士 (Gregory, John 1724—1773 エジンバラ大学医学教授) について本書の研究に必要な限りをつぎに記すこととする。父はアバディーン (スコットランド) のキングズ・カレッジの医学教授。幼年時代父に死別したので、兄の世話と従兄弟にあたる形而上学者リード (Thomas Reid アバディーン大学のキングズ・カレッジ哲学教授・グラズゴー大学道德哲学教授) の影響の下に生地アバディーンで教育を受けた。その後エジンバラ大学で医学を修めた。アバディーン大学で三年間数学・道德哲学・自然哲学を講じた。一七五二年結婚、妻は美と機知と財産の持主。その後ロンドンに移り英国学士院の会員となる。しばらくしてアバディーンに呼びもどされ同大学医学教授。一七六六年エジンバラ大学医学教授、スコットランド王の侍医となる。

彼の大学の講義は華やかさはなかったが、話し振りが簡潔・率直で成功をおさめた。専門の医学上の著作は大した価値あるものではなかった。彼の一般的性格は良識と慈悲心に富んでいた。顔色に生氣はなかったが、振舞や話し振りは人に好感を抱かせた。哲学者ヒューム (David Hume) ・哲学者・詩人ビーティ (James Beattie) 等と親交があつた。三人の息子と二人の娘を遺した。

本書『ある父の娘への遺訓』の初版は著者の死の翌年 (一七七四) 刊行されたところから見ると、文字通りの「遺訓」、つまり実際に前記の二人の娘に宛てて遺言的に書かれたものを誰かが死後出版したものであるらしい。彼の全

集四卷は一七八八年に刊行されたが、その中には彼の専門の医学の分野の他に医師の義務・職分や哲学の方法などを論じたものも多く、また哲学者・詩人との交友関係も多かったことなどから見て、哲学的教養の豊かな人であったことが明らかであり、それが本書の中に織り込まれ、本書の所説・教訓を哲学的に根拠づけていることを念頭におく必要がある。またスコットランド王の侍医の地位についたということは、医師としての才能は別として前記の彼の良識・慈愛・優雅さを示すものであり、これが本書の随所に絢なされていることも念頭におきたい。本書はその後も色々な版で刊行され、さらにフランス語の版も多数出た。著者の死後一世余りを経過した一八七七年になっても新版が刊行されたところを見ると、西欧社会に及ぼした影響力の広く且つ長かったことに驚かされる。グレゴリ博士は専門の医学者としてよりはむしろ女子教育家ないし女性論者として名をなしたと言えよう。(註二)

(註一) John Langdon-Davies, *A short history of women*, 1948, p. 218.

(註二) 本論の形式を要約すれば、まず原文の一パラグラフを一節として、その拙訳を各節の冒頭に『』の中に入れて掲げる。その中で「」の中は筆者の挿入。

そのつぎに右の訳出したものにつき一応女性訓として理解・考察・論評する。最後に本研究の主題である女性偏的立場から考察・論評する。しかし右の女性訓の中で女性観が直接表明されている場合はその箇所での主題の研究をする場合もある。

一

『私がこれからお前たちに授けようとしている教訓は不完全なものであると思わなければいけない。というのは、女性の立居振舞の中には、女性でなければ分らない無数の名状し難い優雅さがあるからである。私が今お前たちに書き遺そうとしていることに耳を傾けるなら、お前たちはきっと得るところがあるであろう。お前たちは、少くとも一生涯に一度のこととして、お前たちに媚びへつらったりお前たちをだましたりすることには少しの関心をも持たない

一人の男「著者自身を指す」の純情に接するであらう。』

以上は序言である。およそ教訓はそれを受けとる側の者が、身にしみて感じて実践に移すのでなければ、授ける側の者の徒労に終わるといふわけで、特にこの場合は対象が自分の愛娘まなむすめという次第もあって、このすべり出しには特に慎重な配慮がおかれている。

まず女には男がうかがい知ることを許さない気品・優雅さのあることを説いて、娘たちを励まし、ある意味ではおだて挙げておいて、以下の教訓を熱心に読もうとする娘たちの意欲をかき立てている。「女でなければ分らない」とか「男でなければ分らない」などという表現はよく耳にするのであるが、哲学者は範疇（認識の形式）の男女差などは説いていないようで、どうもおかしい。これは「その身にならなければ分らない」などと同じように、局外者では分りにくい独自の微妙なものの存在を説明する場合の表現の技巧と見るべきであらう。

つぎに、世間には女を口説いたり、だまそうとするような口舌がないでもないが、この教訓者の心は、娘たちが本当に女らしく成長すること以外には、何の下心もない純粹なものであることを説いて娘たちを信頼させようとしている。これは言わば「男の純情」の一面であって、以下の教訓の中で女の憧憬の的である「男の純情」の本質を展開することを前ぶれして、以下の叙述を魅力的に読ませようとする配慮が見られる。

この序言だけでなく教訓全体が柔か味を帯びているのは、教訓者の人柄から来ていることでもあるが、娘たちのことだから特になめらかに誘導しなければならないという細心の心遣いもうかがわれる。一言でいえば、父性愛の苦心の現われと言えよう。

二

『宗教上の義務は、厳格に言えば、男女を平等に拘束するとしても、生れつきの特性および教育において明確な男

女別のあることが、女性に見られるある種の悪徳をば特にいやらしいものにするのだ。……女性の秀れた優雅さ・女性の淑徳・平素の女子教育の厳格さが、大概の男が陥っているそうした悪徳への誘惑からお前たちを大幅に守っているのである。女性の氣質の生来の敏感性と柔軟性が、愛情と多くかかわりのあるような義務の実行に対してはお前たちを特にふさわしいものとするのである。そしてこのことが、女性の物思いには生れつきの暖か味があることと相ならんで、お前たちを献身・奉仕の感情に対して、特に敏感なものにしているのだ。』

本節は、特性および氣質に生来の男女差があることから当然道徳にも男女差がなければならぬとし、そこから女性道徳を論じ女性の理想像の一面をのぞかせている。現代フェミニズムの認める男女差の範囲は身体・生理的機能およびそれに基づいて派生するものだけであって、能力・性格・道徳などにおける生来的な男女差は認めないのが普通である。ところが著者においては、男女の生来の特性・氣質は明確に違っており、したがって教育においても当然男女別がなければならないとする立場をとっている。この立場に立つかぎり、本節の叙述は大体において首肯されなければならず、内容としても日本などでもよく言われてきたことで、それを学者らしく根拠づけたまでのことである。

本節の最初に述べていることは、男の場合には大目に見られている悪徳・悪習——たとえば未婚時代の異性関係・配偶者以外との異性関係・あぐらや道ばたなどでの放尿のようなふしだらな姿態・飲酒・喫煙・賭博など——も、それらを女がしたとなると特にいやらしく感じさせることを指すのであろう。それは根本的には生来の特性・教育に男女別があることからくるのだが、そのつぎに彼が詳論して掲げている三つの原因について言えば、優雅さ(Delicacy)が生来の特性であり、淑徳(Modesty)が優雅さの上に磨き上げられる女性道徳であり、女子教育の厳格性は優雅さから淑徳への絶対に必要な技術過程と考えられる。この厳格性も東西軌を一にし、日本においても『女大学』第一条の宣言するところであり、封建的家族制度ともよく適合させたものであった。

つぎに述べられている柔軟性・敏感性・暖か味なども日本でもよく言われることだが、著者によればこれらは氣質

(disposition)であり、やはり生来的なものである。ところが前述の優雅(繊細)は特性(character)であってしかも生来的なものであり、特性と気質との区別や関係は明らかでない。しかし、優雅(繊細)という特性は、本書の中の色々な所説・教訓を根拠づける原理として再三再四飛び出してくるところから見ると、気質よりも根源的なものであるらしい。つまり、柔軟性・感性・暖か味などは優雅(繊細)の一面にすぎないか、または優雅の添物として造物主から賦けられたものなのであろう。

本節を女性訓として見れば、当時西欧でも支配的な夫婦隨的夫婦觀をがちりと植えつけて、自分の娘たちの生涯の安泰を計ろうとねがった親心から、まずその基礎工事に取リかかったところである。

本節を女性觀の立場から考察するならば、男女は身体だけではなく、心も違つたものであるとする女性觀であり、その究極の根拠を造物主(Nature)に求めている。ここで言う生来(natural)とは、造物主の賦けたもの・天与・天の配剤などの意だからである。これはルソーの女子教育論における「自然」と同じ思想・同じ論法であり、十八世紀に盛んであった自然法思想の現われである。学説・主張・教訓など究極の根拠を「造物主」に求める、あるいはそこに逃げ込むことは、形而上学であり、「耳ある者は聴くべし」ということになって、最早論議を許さないわけである。つまり、「女らしさ」という女性觀の哲學的基礎はここにあるのであって、それをグレゴリ博士はこの女性訓の冒頭に宣言しているのである。

(註) 教訓は理論ではないから、これを煎じつめれば結局は形而上学的なものになるのは当然である。日本の『女大学』でも、「女は夫を以て天とす」(第六章)「女は陰性なり」「男は天にたとへ、女は地に象る」(第十九章)と説いているのはこれを示すものである。

『女の置かれる境遇は種々様々であって、その中には、宗教的な支持がなければ元氣よく礼儀正しく振舞うことはできないような境遇さえもあるのだ。女の全生涯はしばしば苦難の生涯である。女は商売に飛び込むわけにもゆかないし、また男が不運に打ちひしがれた時よくやるような道楽や放蕩に憂さ晴らしをするわけにもゆかない。女は自分の悲しみを、黙々として、人に知られることもなく、憐れまれることもなく耐え忍ばねばならない。女の心が苦惱で引き裂かれ、絶望に沈む時でも、しばしば晴れやかで快活な顔を忘れてはならない。こういうわけで女の唯一の憂さ晴らしは宗教的な慰さめの中にあるのだ。女が男よりもよく家庭の不運に耐え得るのは、主として以上のことからくるのだ。』

西欧で宗教と言えば通常キリスト教のことをいうので、いやしくもキリスト教を知る者から見れば本節の訓えはきわめて当然な事柄であって、むしろ平凡であるとも言えよう。そこで問題の第一はこれを特に女性訓としたところにある。著者のあげた理由を一言でいえば、男よりも女は現世の苦難が多大であるということである。男の苦難と女の苦難とは性質・種類が違ふから比較できないという論理も成立するし、苦難とは心の問題・主観の事柄であるから比較できないとする論理も成立するであらう。しかし男女関係という人間関係およびそこから派生する諸々の事柄に関する限り、男性支配 (androcracy) の社会成立以来、女性に男性の抑圧の下に苦しんで来た事実が女性史の教えるところである。

さてキリスト教では周知の通り「苦難は恩恵」であるという。しかし苦難を克服して恩恵に転化するためには信仰の力が必要であり、苦難が強大であればそれに対応して信仰の力も強くなければならないから、そこに本節の教訓の意義が生れてくるのである。人生は「涙の谷」であるから、苦難を全面的に排除することは不可能であるとしても、

苦難を男女平等に分ち合う社会は考えられるところであり、現にそういう方向にむかって社会は進んでいるという歴史哲学的な見方をする学者もあるが、^(註一)そうした社会は一生・一代では望むべくもないから、本節のような教訓も存在の理由があるのだと言えよう。女は「百年の苦楽他人に依る」のであるから、どんな不運・不幸に見舞われたいとはかぎらない。それがどんなものであろうとも、よく耐え忍んで生涯を完するようにとの親心から、その克服策としての宗教の力をグレゴリ博士はここに教えたものであろう。

つぎは問題の第二で人生苦の解決方法としての気晴らし・憂さ晴らし(著者の用語は前の方が *dissipate oneself* 後の方が *resource*) についてである。この手段にうったえることは西洋でも女には容認されなかったことが分る。著者はこのことにも男女別が存在した社会事実の原因を探究し批判することなしに、当時の社会慣習にそのまま従っている。これは英国民の伝統尊重思想からも来ているであらうし、またそうした態度が娘の生涯を完する所以と考えた親心からでもあらう。

本節を女性観の立場から見ると、宗教的方法は男女共通として、問題は気晴らし・憂さ晴らしにも男女別が存在した社会事実からの考察である。これは日本でも同様で、唯一の気晴らしとも言うべきおしゃべり(多言)さえ『女大学』では厳禁されたばかりでなく離婚原因でさえあった。これは男性支配の社会であることから来ているであらう。しかし、一例をあげれば精神労働は肉体労働よりも多くの嗜好品を必要とすると言われているように、^(註二)仕事の男女別からも来ているものようである。すなわち大ざっぱな見方ではあるが、「男は一步門を出ればそこは戦場」と古くから言われているように、男は生存競争の巷に神経を労するのに反し、女は静かに家庭でこまごました用事を片付けておればよいことである。これは労働科学の分野でもあらうし、また気晴らし・憂さ晴らしの方法・機関・組織の未曾有に発達した現代の風潮との関連においても考察せらるべき多くの問題を含んでいるであらう。ここでは唯、男性横暴の結果勝手な憂さ晴らしをして来たのだということだけで割り切るわけにはゆかないことだけ

を付け加えておきたい。

(註一) L. F. Ward, Pure Sociology, 1921, pp. 372-3.

(註二) 肉体労働も現代のようないわゆる疎外労働となると、精神労働よりも多くの逸楽・刺戟物を欲求するようになるので、それほど簡単ではない。

四

『女は自分が宗教に無関心であることで男に好かれようと思えるならば、それはとんでもない思い違いである。不信仰の男でさえ女の不信仰は好まないものである。人間性をよく知っている男なら必らずや、女の宗教的風格と心情の柔軟性・感性とを結びつけるものなのである。少なくとも、女の宗教的風格の欠如をば、女の欠点の中でも男が最も忌み嫌うあの硬くて男のような精神の証拠として、男は常に認めるのだ。さらに言うなら、男は女の宗教心をば男が最も心を惹かれるあの女らしい淑徳の主要な保証の一つとして認めるのだ。もしもお前達のどちらに対しても『二人の娘の何れかを指す』ある男が愛着を求めながら、お前たちの宗教的信条を振り捨てさせようと努力するなら、その男は物知らずか、それとも人前では敢えて言えないような下心〔女の肉体を求めめる心〕をお前たちに對して持っているか、そのどちらかであることは間違いないですよ。』

宗教的な女をはたして男は好むかどうか、について娘心では分かりかねて、不安な気持ちで迷っている。それに対して著者（父親）が男性の代表格で教えているのが本節であるが、筆者としては一応合点のゆかない点多々ある。これは十八世紀の英国と二十世紀の日本という時代と社会のへだたりから来るのかも知れない。しかし原因はそれだけではなく、著者は自分の娘の将来の結婚が同時に宗教的結合でもあるようにと念願するの余り、娘は男性の心理を解し得ないという有利な立場に身を置いて、幾分権威的にこじつけ的な強引な教え方をしているところから来るのでは

なからうか。こうした態度は学問の領域では許さるべくもないが、本書は教訓であって普遍妥当性を要求されるものではないから差支えないのだとも言えようか。特に本書は全女性に向って教訓を垂れるというふうなものではなく、自分の二人の愛娘に対して遺言的に書かれたものであるらしいから尚更のことである。以上のことを念頭におきながら、以下順を追うて考察してみたい。

無宗教の故に男に好かれようと女が考えることそのこと自体が、宗教的な女を好まない男が当時の英国にも相当したことを示すものではなからうか。無宗教は反面から言えば現世謳歌・現世享樂エンジョイなのだから、そういう女を男が好むのは当然だとも自然だとも言えるからである。日本でも同様で、娘が教会に通うのは結構だとしても洗礼を受けるとなると二の足をふむ家庭があるのは、娘の将来の縁談に障ることを恐れるからである。要するに宗教的な女を好む男・好まない男・そうしたことを問題にしない男の三種類があって、その混合率は国により時代により異なると言えるのではなからうか。

つぎに著者はキリスト教的風格と柔和な心・俊敏な心とを結びつけているが、これは聖書の典拠を一々挙げるまでもなく正にその通りだと思う。しかし無宗教の人でも、例えば詩人・作家・芸術家などの中には同様な心情を持った人が見受けられる事実は否定し得ない。したがって無宗教の女だからといって男のようなごつごつした心を持っているとは言えないのではないか。同じ柔軟性・敏感性にしてもキリスト教から来るものと、そうでないものとは持味が違うと考えているのかも知れないが、それにしてもこの辺の論調は荒削りで精緻さを欠いている。また著者は女の場合として述べているが、こうした信仰と心情との結び付きは男女共通なものではなからうか。

つぎは男が最も心を惹かれる淑徳（金）（female virtue）についてである。淑徳と言っても当時見せかけだけのものも多かったらしいが、信仰があれば淑徳が本物であり不動であることを保証する、と著者は言う。キリスト教は謙虚・謙讓の心を養うという一点から言っても確かにその通りだと思う。しかし信仰も見せかけのものがあるので現実にも

っと複雑・微妙であろう。何れにしてもキリスト教信仰が前述のような男が惹きつけられるもの（柔和な心・俊敏な心・淑徳など）をもたらすことに異論はないのだから、愛する女の信仰をわざわざ振り捨てさせようとかかる男は、日本流に言えば「野郎」なのであって、グレゴリ博士が本節の最後で愛情をこめて言っていることはそのまま首肯できる。

本節は初めに記したように論理構造の精緻さを欠いて、権威的に述べられている。これは学術論文ではなくて教訓なのだから権威的であるのが当然だとも言えよう。（新約聖書マタイ伝第七章二九節）それは一面自分の娘の将来の結婚が同時に宗教的結合でもあるようにと熱烈に念願するの余り、そういうたみかけるような論法になったのではないかと述べたのだが、もしそうだとすればグレゴリ博士は信仰篤くその家庭には宗教的雰囲気の流れていたと想像される。博士の次男ウィリアムが後年カンタベリー大聖堂の説教者となった事実はそれを物語るものではあるまいか。

最後に女性観の立場から考察する。本節と前節は一言で言えば女子の宗教教育の重要性の強調である。この強調が生れた原因を見るに、まず特殊事情として挙げられるものとしては、前述の著者が信仰の篤い人であったらしいことと、著者が生れ育ったスコットランドの地方色である。スコットランドは周知のようにピューリタンの主要な発祥地であることが実証しているように英国の中でもとりわけ宗教心の盛んな地方であるからである。しかしこの特殊事情だけではなく、一般に女子教育に宗教を持ち込むことは西欧女性訓の特徴の一つで、ルソーなども女子の宗教教育を大いに論じている。^(註二) 宗教教育は人間教育であって特に女性訓の中で論ずるのはおかしい、すなわち宗教教育に男女別はないと論理的には言えようが、事実は決して然らずであった。それは聖パウロにさかのぼる。^(註三) キリスト教は男子に對するとは別な意味で特別に密接に婦人と結びつけられてきた。しかも旧約の創生記やパウロの女性訓などの中で男子を女子よりも極端に上位に見る部面は次第に捨棄されて、日本の女訓書などには到底見ることでない高度の女

子教育觀を生むに至った。しかも單なる教訓として終ったものではなく、特にキリスト教の柔和の思想・暴力否定の思想は暴力で苦しめられてきた婦人の積極的關心・共感を呼んだ關係もあって、有名・無名の偉い婦人信仰者が多数出た。要するに本書のこのあたりは、後述の第十二節と共に、女性の理想像はキリスト教信仰をまっけて初めて完成されるとした当時の支配的な女性觀をよく示している。しかし、その背後には長い歴史の伝統があったのである。

(註一) ラングダン・デヴィスによれば、十八世紀中頃の西欧有閑階級の婦人の貞節も淑徳もすべて偽物であったという。

(John Langdon-Davies, A short history of women, 1948, p. 218)

(註二) ルソー『エミール』第五篇、平林初之輔訳、岩波文庫、四五頁以下。

(註三) 新約聖書の中のパウロの女性訓はおよそつぎの箇所に見られる。

一、コリント人への第一の手紙第七章一一六節、二五―四〇節

二、同書第十一章三一―一六節

三、エペソ人への手紙第五章二二―三三節

四、コロサイ人への手紙第三章一八節

五、テモテ人への手紙第二章九―一五節

五

『女らしい性格の中の主要な美德の一つは、あのつつまじやかな遠慮・あの控え目な優雅さである。それは人目を避けるものであり、賞讃の眼で見られるとなるとまごつくものである。羞かみ^{はに}を失った少女は最も強力な美の魅力を失ったのだ。男の場合は、羞かみとなって現われるような極度の感受性は弱点でもあり手足まといでもあることは、私がこれまでしばしば感じてきたことなのだが、女の場合はそれが格別に魅力的なのだ。衒学者^{ペダント}どもは自分

を哲学者だと思ひ込んでゐるので、女が何等罪の意識もないのに羞かむというのはどういふ訳か？を問題にする。それに対しては次の答が充分である。すなわち、女性が自分には罪などはないとする罪の状態にある時に、造物主は女性を羞かませたのであり、女性が羞かむとき男性をして女性を愛させるように仕向けたのだ。

この節は主として女性特有の羞恥心・はにかみについてであり、叙述も平明で理解も容易であるが、羞恥心の形而上学的説明の部分はこじつけの嫌がないでもない。これは哲学者もグレゴリ博士も、罪と羞恥心とを結び付けなければならぬとする論理構造にこだわっているからだと思う。ルソーのように、羞恥心とは弱者が強者を征服する武器として自然が弱者に与えたものである、とする形而上学的説明の方が明快である。^(註二)

女の羞恥心が男を惹きつける魅力的存在であることは、洋の東西を問わず承認されている事実のようである。この事実にもとづいてグレゴリ博士は羞恥心の重要性を強調しているだけであつて、この事実の理由の説明には缺けている。この説明がルソーには備っている。彼によれば、神（自然）は人間の無限の情欲を抑制するものとして、男には理性を与え女には羞恥を与えたのである。^(註三)これを裏から言えば、羞かみの現われはその背後にひそむ無限の情欲を示唆し、それを垣間見せているわけだから、男が惹きつけられて行く道理である。

グレゴリ博士は後述の箇所（第十七節）でも羞恥心について再説しており、そこでの説明はこことは違つてゐるが、その根源を造物主（Nature）の場合自然も神も同義語）に歸している点では同じである。ルソーによれば前述のように、羞恥心とは弱者の武器として自然が与えたものである。羞恥心の窮極に自然をおいている点では両者同一である。ここにも十八世紀の自然法思想の盛んな様相がよく現われていると思う。何れにしても羞恥心が自然必然の作用であるとするれば、その重要性を強調することは無意味なわけであつて、事実ルソーにおいてはそれを強調している箇所は見当らない。グレゴリ博士においてはこれが強調されているが、これは自然と道徳とが分離・対立させられなかつた時代の産物と言えよう。自然法は時には因果必然の法則（Natural law）となり、時には人間の守るべき規範

(Law of Nature) ともなり、言わば大變便利・重宝な法則であつたわけである。

自然法 (存在の法則 *Sein*) と道德法 (當為の法則 *Sollen*) とを峻別する二元論の立場からすれば、グレゴリ博士のこの教訓は笑うべきナンセンスとなるであらう。しかしこのように簡単に割り切つて片づけることを許さない問題が残るようである。というのは、現代女性の多くはいわゆるドライになつて大方羞かみを失つたと言われるからである。すなわちこのことは自然法則がもはや働かなくなつたことを意味するからである。これは如何に説明さるべきであらうか。本論は女性論であるから、この問題に対する詳論を避けて簡単に言えば、人間は自然法則に抵抗し、ある限度まで自然法則の貫徹を妨げ得る場合があるからだと思う。これを羞恥心の場合について結論だけを言えば、資本主義社会が人心をドライ化したからだと思う。この「女訓書」が出た一七七四年頃の英国は漸く資本主義もその基をすえ、産業革命も始まりかけた時であり、したがって人心のドライ化から羞恥心の喪失も始まりかけた時であつたであらう。この風潮に対し、これを憂え、これを叫んだところに、この女訓書の時代史的意義があつたと言えよう。

以上を女性論的立場から考察するならば、羞恥心の発露・優れた男性への魅力・立派な結婚・娘の生涯の安泰という一連の目的論的系列が構成されるのであつて、これを構成させる原理は寄生主義的・女性観である。ここに寄生主義 (parasitism) というのは、女性の社会的本質を男性への寄生的存在と見、したがって女性の生活規範としても寄生主義 (現実には寄生主義的結婚主義) を奉ずる立場である。この寄生主義は当時の支配的な女性観であつて、本書の中に流れ込み、本書全体の底流となつてゐる思想である。本書は形式上は教訓書ではあつても、その背後にひそむ當時の寄生主義的女性観と、そこから派生する寄生主義的結婚主義をよく物語つてゐるのである。

(註一) ルソー『エミール』第五篇、平林初之輔訳、岩波文庫、五頁。

(註二) 『同書』七頁。

六

『機知は女が振うことのできる最も危険な才能である。それは充分な思慮分別と善良な性質によって慎しむ必要があるし、そうでないと多くの敵をつくることになるだろう。良識を人前に示す場合でさえもよく気を付けなさいよ。他の仲間の人達に対する出しゃばりと思われるからである。しかし、たまたま自分に何か学問がある場合には、特に男の人達に対してはそれを深く秘密にしておきなさいよ。そのわけは、男は一般に、偉大な資質・教養・知性をそなえた婦人をば嫉妬深い・敵意ある眼で見えるものだからである。』

本節は自分の知的才能を外部に示す場合の心構えについて注意を与えている。全般に消極的であって、用心深い態度をすすめており、背後にある当時の女性観・社会事情をよく物語っているように思う。

最初は機知^{ウィット}を示す場合についてであるが、機知は女性に宿る天与の賜物として、これを讃美した西洋の詩句・諺・言草の類は古来非常に多い。女性蔑視論者と言われるシヨールペンハウエルでさえ女性の長所として認めている^(註)。しかしこの称えられた機知とは、男が憂鬱・不機嫌な時、にっちもさっちもゆかなくなった時など、臨機に即座に閃めく才智のことを指している。男の側から見て大変結構な好ましい才智であって、日本の「才色兼備」や「妻をめとらば……才たけて」に見られる才とはこれを言う。邦語を使い分けて言うならば「機知」ではなくて「機智」なのである。ところがグレゴリ博士がここで言う機知とは、当意即妙的に一座に興を添えて喜ばせる、言わば高級な頓智を指しているらしい。西洋ではウィットやユーモアは尊重され高く評価されているもののである。そのわけは、シヨールペンハウエル流に言えば人生苦よりの一時的解放をもたらすからであろうが、一方そのこと自体が高度の教養の産物だからであろう。特にウィットはユーモアよりも高度の知的教養が必要とされているようである。そこで女が人前やたたらにウィットを飛ばすことは、自分の知的教養をひけらかすことになって、人の嫉妬心・敵意を買うこととなるので、グレゴリ博士は前述のような慎重な心構えを訓えているわけである。

つぎは良識を人前に示す場合であるが、これは「仲間」(company)という言葉からも分かるように、自分の所属している団体の運営などについて良識に基づいた提案をするような場合を指しているらしい。そうした提案そのこと自体は良いことだとしても、人の世はそれほど単純なものではなく、結局人の嫉妬心・反感を招いて、「出しゃばり」(assume a superiority)と蔭口をたたかれ、とどのつまりは「出る釘は打たれる」ことになるからである。

つぎは自分の学問を人前に示すかどうかの問題であるが、英国の特権階級には広く家庭教師の制度が発達していて、向学心の盛んな娘はこの家庭教師について高度の学問を身につけたもののようである。こうした学問は、前述の二つの場合のように用心深く控え目に示すことさえいけないのであって、深く秘密にせよと訓えている。日本流に言えば「能ある鷹は爪をかくす」でもあろうか。学者の場合は別として、素人が学問を身につけることは、それが人格内容を豊かにし生存の意義を高めるためであり、内に秘めおかれることによって、かえって奥床しい人柄が形成されると考えたからであろう。何れにしても学問は本来男の分野とされていた時代に、この分野で頭角を表はすような女は当然に男の嫉妬心と敵意を浴びることになるからである。それは問うところではないとしても、親心の立場からすれば良縁を逸することにもなりかねない。さらに、家庭は憩いの場所であるから理屈を言う妻を好まない男心を知る父親は、娘の学問が結婚後の家庭の不和の原因となる場合にも想到したことであろう。

本節で説く嫉妬心・意地悪・敵意というふうな人間の心理作用は、当時も今も変りないであろう。しかも本節の訓えは、慎ましやか・奥床しさに総じて淑徳というふうなことが女性の第一義的道德とされた時代の女性観をよく物語っている。そうした女性観が変貌した今日では相当割引して考えなければならぬ。しかし、現代においても大部分の女性が依然として寄生主義的結婚主義をとっている。その限りにおいて本節の訓えは今尚現実的妥当性を持っているのであって、たとい奴隷道德と言われようとも、今も昔も変らない娘を持つ親心のよく知るところである。

A Study of the Typical View of Womanhood in the 18th Century Europe (I)

Résumé

The text of this theme is a very famous little book, entitled *A Father's Legacy to His Daughters*, written by Dr. John Gregory (1724-1773), professor of medicine at Edinburgh University.

At first we consider the advices in the text and then inquire into a view of womanhood, the so-called Female Character, which lies in the background of the advices. The advices in the first part of this study are as follows.

1. Introductory advices
2. The distinctive features of female virtue
3. The woman's only resource is in the consolations of religion.
4. Every man who knows human nature loves a christian girl.
5. When a girl ceases to blush, she has lost the most powerful charm of beauty.
6. Advices in displaying wit, good sense and learning